

2018年10月2日

## マツダ、心と体を元気にするクルマづくりを目指した、 電動化とコネクティビティの技術戦略を公表

—人間中心の「走る喜び」を追求し続け、「地球」・「社会」・「人」に貢献—

マツダ株式会社(以下、マツダ)は本日、マツダならではの「人間中心」の開発哲学にもとづき、日常の運転シーンにおいて、クルマと人の一体感が感じられ、ドライバーも同乗者も安心して乗っていただける「走る喜び」をさらに進化させるとともに、人間らしい心豊かな「生きる喜び」を実感できるカーライフの実現を目指した電動化とコネクティビティの技術戦略を公表しました。これは美しい地球と心豊かな人・社会の実現を使命と捉え、「地球」・「社会」・「人」それぞれの課題解決を目指した技術開発の長期ビジョン「サステイナブル“Zoom-Zoom”宣言 2030」に基づくものです。

クルマの持つ価値を、より一層魅力的なものにする電動化技術とコネクティビティ技術の概要は以下の通りです。

### ■ 電動化技術

将来においても大多数のクルマに搭載が予測される内燃機関を磨き上げながら、小型軽量の電動化技術を展開することで、CO<sub>2</sub> 排出量削減と「走る喜び」の進化を追求し続けてまいります。一方、クリーンな発電で電力をまかなえる地域や、大気汚染抑制のために自動車に関する規制のある地域に対しては、電気自動車も最適なソリューションとして導入してまいります。

- 「Well-to-Wheel(燃料採掘から車両走行まで)」視点で企業平均 CO<sub>2</sub> 排出量を 2050 年までに 2010 年比 90%削減することを視野に、2030 年時点で生産するすべての車両に電動化技術を搭載。
- 2030 年時点におけるマツダの電動化技術搭載車両の構成比は、電動化技術を搭載した内燃機関車が 95%、電気自動車は 5%を想定。
- 独自開発の電気自動車は、電気駆動ならではの利点をいかし、人間の特性や感覚を第一に考えたマツダならではの「人間中心」のアプローチで開発。
- 電気自動車は、バッテリーのみで駆動するモデルと、これにマツダ独自の小型・軽量で静粛性に優れたロータリーエンジン(以下、RE)を組み合わせ、バッテリーが一定レベルに減ると発電し航続距離を延ばす新開発のロータリーエンジンレンジエクステンダーを搭載したモデルを開発。
- ロータリーエンジンレンジエクステンダーは、RE のコンパクトかつ出力の高さを活用し、共通のパッケージングでも電動化技術のマルチソリューション化を可能とする将来構想をもとに開発。
- ロータリーエンジンレンジエクステンダーは、RE と気体燃料との親和性をいかし、LPG(液化石油ガス)を利用した災害時における緊急給電も想定して開発。

## ■ コネクティビティ技術

「人間中心」の開発哲学にもとづき、クルマを通じた体験や感動の共有によって人・社会をつなげ、いつまでも人間らしい心豊かな「生きる喜び」が実感できるコネクティビティ技術を開発。「走る喜び」とともに、新たなクルマの価値として提案し、人と社会を元気にすることを目指します。

- コネクティビティ技術によって、人と人・社会をつなげることで、社会構造の変化にともなう、人と人とのつながりの希薄化などの社会的な課題解決へ貢献。
- モデルベース開発と連携し製品開発に反映することで、品質とお客さま満足度をさらに向上。
- トヨタ自動車株式会社とのアライアンスを最大限に活用して開発。

代表取締役社長兼 CEO の丸本明は、「いま自動車産業は 100 年に一度の変革期を迎えているといわれていますが、マツダはこれを新しい『クルマ文化創造』のチャンスだと捉えています。『CASE\*』などの新技術はクルマをより魅力的な存在にする可能性を秘めており、マツダならではの『人間中心』の開発哲学をもとに新技術を活用しながら『走る喜び』を『飽くなき挑戦』で追求し続け、お客さまと世界一強い絆で結ばれたブランドになることを目指してまいります」と述べました。

以 上

---

\*コネクティビティ技術／自動運転技術／シェアード・サービス／電動化技術といった新技術の総称。